



徳田安春(原作)梅屋敷ミタ(漫画)

『こんなとき、フィジカル—超実践的！ 身体診察のアプローチ』

[評者] 神戸大学医学部附属病院 感染症内科 岩田健太郎

漫画は世界に誇る日本独特の表現媒介である。それはアメコミやフランスのバンド・デシネとも異なる、実にオリジナルなもので、ここ数十年その独自性はさらに先鋭化、多様化を見せている。

多様化の一例が「学習漫画」である。これも昔は通俗的な子供向けのものだったのだが、石ノ森章太郎の「マンガ日本経済入門」あたりからその質が飛躍的に向上し、学習媒体としても作品としても楽しめるものが増えてきた。我々は漫画で食べ物を学び、スポーツを学び、歴史を学び、どこぞの政治家のように国際情勢も学び、(なんと)音楽まで学ぶ。だから、医学を漫画で学んでいけない理由もないだろう。

他方、フィジカル(身体診察)学習方法も近年飛躍的に進歩している。その理由は何といってもYouTubeだ。教科書では理解し難い心音や神経、筋骨格系の診察手技に至るまで容易に理解できる。もちろん、優れた指導医にベッドサイドで教えてもらえるのが一番だろうが、いつでもどこでも繰り返し学習できるという点ではYouTubeに軍配が上がる。

しかし、通俗的な診断学のテキストにもモダンなYouTubeにも欠点はある。「いつ」その所見を探しに行くのか、そのシチュエーションがわからないのである。

そこで本書『こんなとき、フィジカル』である。その名の通り、どのような患者がどのようなプレゼンをしている時に、ある診察手技が有用であるか、シンプルなストーリーで明示している。漫画なので、YouTube同様、複雑な診察も容易に理解できる。ひとつひとつのストーリーは独立していて、様々な患者のフィジカルが論じられているが、全体としてのストーリーにも一工夫あり、研修医たちの成長物語として(自分になぞらえて)読むこともできる。



実際、フィジカルはストーリー抜きでは会得できないのだ。あ！！！と見つけた差し口から診断したツツガムシ病というストーリーが、次の不明熱患者でもソローな視診の動機付けになってくれる。

総合診療医にもっとも大切なのは「観察力」であると本書は説く(p160)。その観察力を育むのは「もっと観察したい」と思わせる好奇心である。その好奇心を生むのは、観察がもたらした成功体験(ストーリー)が高めたモチベーションだ。そのモチベーション・アップの瞬間を、漫画の登場人物と疑似体験できるのが本書の特徴なのであり、それは類書では得られない感覚なのである。

本書が多くの学生や研修医の「あ！！」体験の助けになりますように。

● A5 / 頁 228 / 2015 年 / 定価：本体 2,800 円 + 税
[ISBN : 978-4-307-10169-1] 金原出版刊